EKWC(ヨーロッパセラミックセンター)滞在制作報告

山田浩之
日程：2 月 1 日～3 月 15 日

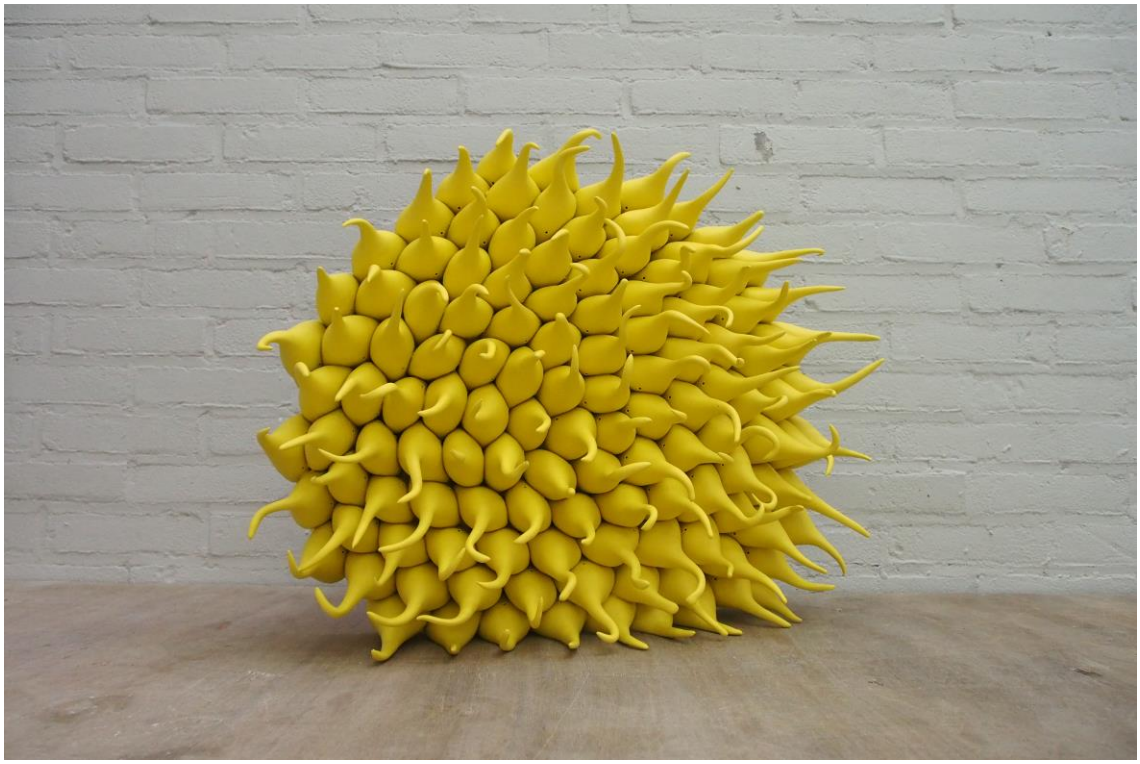
2 月 1 日にアムステルダム空港に到着、EKWC ディレクターの RANTI さんが迎えにきてくださり、そこから 1 時間 30 分かけて電車で EKWC のある OISTERWEJK に移動しました。
到着後数日間は時差ぼけの為制作にうまく入り込めないだろうと思って、事務室のスタッフからオランダのやきもの産地の情報を集めて、早速その足で電車で 1 時間ほどの DELFT という町に行き、現在も唯一生産し続けている Royal Delft という Museum を併設した観光工房を見学しました。そこで働く職人さんにお話を伺い Delft の歴史などを知りました。東インド会社を通しての伊万里焼、中国陶磁器との関係、そして Delft blue と呼ばれる技法を学びました。
その時、話が盛り上がって私自身の作品を画像でその職人さんに見せると、面白いのでぜひ Delft にあるオランダ唯一の現代陶芸ギャラリーのオーナーに見せに行きなさいといわれましたので、疑心暗鬼のままそのギャラリーの名前だけを頼りに捜し出し言ってみました。
オーナーは年配の女性でにこやかに迎え入れて下さり、日本から来て EKWC で作品を作る旨を話すと、快く作品集を見て下さり興味を持っていただけました。
後日連絡することになり、EKWC に戻って作品制作を始めました。

EKWC 滞在 4 日目あたりから本格的な制作に入ります。まず注目したのが独特の考え方からくる釉薬の使い方でした。
僕が今までに知っていた焼き物の工程は、土で成型後、素焼き（700～800C）そして施釉、本焼き（1200～1300C）などの手順ですが、その考え方を逆転させた素焼き（1200～1300C）その後、施釉（1000～1100C）という手順でした。そうすることで本来前述の工程では出来ない形が可能になることに気が付き、その上低温の素焼き後の生地とは違って水を吸わないと言う特徴を逆手にとって水を吸わないから出来る釉薬の装飾を思いつきました。
そこで、まずはじめに形状的に釉薬が流れやすい形の小さなテストピースを大量に造り、様々なバリエーションの色、組み合わせ、厚み、などをテストしてみました。

これは１０４０C が融点の釉薬をベースに色釉薬を作って組み合わせをテストしたものです。
その後今度はカオリンマットの融点の低いもの（１０４０C ぐらい）の釉薬で再度技法も含めてテストしました。今度は吸水性がないことを利用してスリップウエアの技法をミックスさせた施釉方法を試してみました。
テスト窯は温度、焼成時間に合わせて料金が決まるようになっていますが、テスト窯は１０KW ほどの大きさの窯で料金的には安いと思いました。具体的には一回に付き焼く 10 ユーロほどで僕の場合は素焼き本焼きを含め 6 回ほど窯をたきました。
マット釉でのテストはかなり魅力的な焼き上がりになりました。

以前からトラ柄、マーブル柄の茶道具を作りたいと思っていましたが良い方法が思いつかずあきらめかけていましたが、意外なところでその方法をみつけることができて満足しています。

釉薬のテストがまとまり立体作品を作り始めました。素焼きと本焼きを逆転させるから出来る形を作ることが出来ました。
最近取り組んでいた作品で、どうしてもある部分に金属などを使ったり焼成後の接着と言う方法をとらざる負えませんでしたが、この逆転の発想で可能性が広がっていきました。



最後の作品も素焼き(高温)のとき横向きに焼き、その後ダイヤモンドカッターで底面を平らに整え自立するようにしてから施釉し、そのまま自立した状態で本焼（1060C）したものです。そして裏面の赤茶色は、EKWC の立地している土地の土を 1000C で焼成し細かく砕いて粉にし、釉着させています。

この一連の作品は EKWC での釉薬の考え方、焼成の考え方があってこそ出来てきた作品です。
これらの僕にとっての新しい技術的な作品を作ると同時に、もう一つの作品を手がけ始めていました。
EKWC は数年前に現在の場所に移転したそうです。そして今ある場所は、もともと 1990 年代後半まで皮工場だったそうで、環境基準問題の意識があいまいだった時代に稼動していた工場からは、大量の薬剤などの有害物質が垂れ流しになっていたそうです。そして汚染された部分を洗浄して今の EKWC が出来ていると言うわけです。今もその土壌洗浄は継続しており建物の外は土を掘り返しその汚染土壌と綺麗な土を入れ替える作業が行われていました。

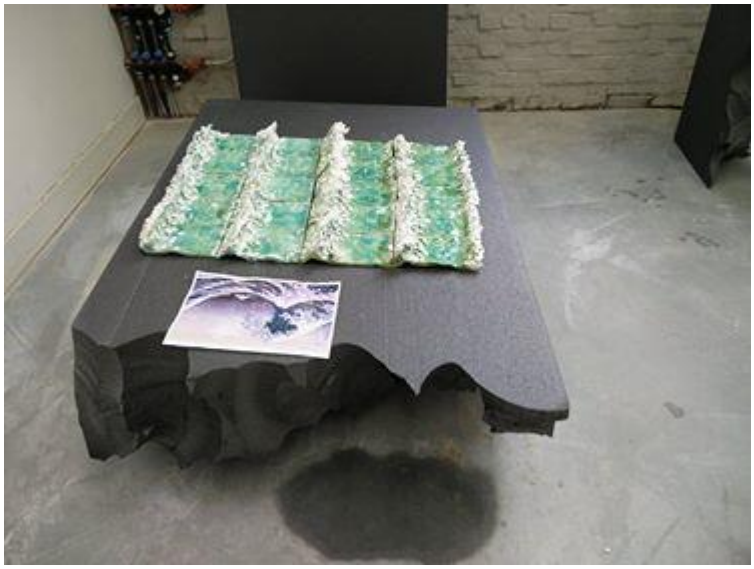
そこでこれは今しかないタイミングだと思い、その工事で掘り起こされた土を使っての作品を作り、EKWC に寄贈するつもりでそのリサーチを始めました。
土地の多くが砂地のオランダで粘土は少なくその土地もやはり可塑性のある土はありませんでしたが、何とか土玉ぐらいなら作ることが出来ました。そしてその耐火度を調べることにしました。すると意外なことに１２５０C でも溶けずに残っていたので、少しずつ耐火度の強い土を混ぜていき 8 種類の調合を作り窯に入れてもらいました。結果興味深いものが焼けたのですが、作品につなげることが出来ず。悩んでいると、あるスタッフがその実験にぴったりの窯があるということを教えて下さり、見せてもらうと、小さなテスト窯でしたが、200C の温度差を作ることが出来る窯でした。早速、大量に作った石ころのような塊の土を順番に並べて焼成してみました。

1000c～1200c の温度差をつけて色のグラデーションを作り、毎日、毎日、焼いては窯詰め焼成の繰り返しで、12 回ほど繰り返し大量の温度違いの石ころを焼き続けました。
そして出来た作品がこれです。

以上が作品制作についての報告です。
作った作品は、2 月初旬に伺った Delft の Gallery Tarra に連絡を取り、出向いてもらって見せました。全作品の半分ほどをギャラリー内にコーナーを作ってもらい置いてもらえることになり、取り扱い作家契約をすることになりました。
運がよかったとしか言いようがないのですが、オランダ唯一の陶芸ギャラリーに作品が常設されることをうれしく思っています。

EKWC の実情

滞在アーティストは常時15～18人いてその多くは陶芸家ではありません。僕がいた期間も、陶芸家は自分ひとりで他は、デザイナー、美術家、料理人、彫刻家、インターンシップの学生などでした。出身国は殆どがオランダで、他にはフランス、ドイツ、イギリス在住のアーティストでした。
中でもプロの料理人が滞在制作していたのには驚きでした。彼と話をすると、コース料理の器をつくりに来ているとのことでした、聞いたときは日本でもよくある話と思っていましたが、日本の食と器のコラボとは全く切り口が全く違っていました。あくまで料理と器を合わせたアート作品でそれ自体が一つの造形になっていて、それに合わせて食材とメニューにきちんとしたアートコンセプト（ミクロとマクロ、宇宙観）があったのでした。
日本で言うところの料理を受ける器と言う概念とは別次元の作品で、感銘を覚えました。



また、陶芸家がいないということは技術競争的な作品作りはありえなくて、それぞれが自分のやりたいことを陶芸を素材に、技術スタッフからのアドバイスを聞きながら形にしていました。しかし陶芸の技術は一朝一夕に出来ないもので、トラブルも多くイメージしたことを形に出来る人は皆無といってもよいとおもいました。スタッフも精一杯のアドバイスをしているのですが手取り足取りと言うわけにもいかず、アーティストからは乾燥段階での割れや釉薬の調子、その他色々と不満の声を聞きました。僕は微妙な立場で、技術指導は出来るけど、あまり言うと専門スタッフの立場がなくなるので、出来る限りスタッフに聞いたほうが良いと最後に付け加えるようにしました。それでも高い料金を支払ってきているのでなんとしてもイメージを形にしたいという気持ちが強く、不平不満はしょっちゅう聞きました。
アーティスト同士の交流は有意義でした。夕食を当番制で全員の分を作るルールがあり僕も滞在中に 5～6 回作りました。全員でアートの話や出身地の話をして、時には作品スライドを見せ合ったりコンセプトを深く話したりしました。
僕自身が今までやってきたこと、作品とは思っていなかったのですが、一汁一菜の器プロジェクトや信楽 ACT、ワンゲルプロジェクトといった活動は、そこにいるアーティストにとっては十分に作品と捉えてもらったのには驚きとうれしさがありました。現代陶芸が立体作品を作ることに終始していることに対して、そこにいるアーティストはその過程、コンセプト、の方が重要でアウトプットは最終的な形となるので作品全体の 1 割にも満たないという考え方が当たり前のように思えました。以前から僕自身もその考えがあったので、自分がやってきたプロジェクトも含め、アーカイブの整理をしていこうという気持ちになったことは僕にとって大きなプラスでした。
また、オランダ中の主な美術館にはいきました。現代美術、ゴッホ、レンブラント・・など多くの作品を見ることで刺激をもらいました。
レジデンス終了後、最後に行った場末の港町 Enkhuizen の地域産業展示の博物館がとても印象的で、地域産業（そこでは造船と漁業）の歴史と産物の展示だったのですがその展示方法がすばらしかった。一例を挙げると、魚のびく（竹かご）を見せるところではその素材と竹かごからのインスピレーションで現代美術家が作品を作りビデオインスタレーションや立体作品、アーカイブ作品など様々な手法と表現で、伝統産業と共に空間構成されている展示でした。その時思ったことは、信楽の産業展示のあり方でした。この考え方での展示は産業展示のつまらなさを払拭できるかも知れないと思ったことを最後に付け加えさせていただきます。

以上が EKWC 滞在報告です。

山田浩之
滋賀県甲賀市信楽町宮町 1779